



「福澤育林友の会」ニュース

第21号 発行日2012年1月10日

福澤育林友の会
東京都港区三田2-15-45 慶應義塾 管財部
TEL:03-5427-1050 FAX:03-5427-1190
<http://www.f-ikurin.jp>



年頭にあたって

慶應義塾長 清家 篤



謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

今年、財団法人福澤記念育林会の解散によって同財団の森が慶應義塾の学校林として継承されて以来はじめて迎えた新年となります。福澤育林友の会の皆様、森によって人を育むという主旨で日々活動をされる中で、これまでも慶應義塾の学校林に訪れてもくださるなど、誠にありがたく思っております。

さて昨年3月に発生した東日本大震災は、日本の経済社会に大きな影響を与えることになりました。被災された地域の中には、慶應の森があって日頃よりお世話になっている南三陸町なども含まれていますが、心からお見舞い申し上げます。被災地の復興、そして日本経済全体の回復をはかり、更なる発展を成し遂げなければなりません。

その時、想起されるのは福澤先生の3つの言葉です。実証科学という意味での「実学」、物事の軽重大小を冷静に見極め、正しい判断を行うという意味の「公智」、さらに災害などに遭って厳しい状況にある人々を思いやる心という意味の「徳心」です。

大震災によって私共は科学やそれに基づく技術の限界を思い知らされました。しかし同時に、震災からの復興もまた科学や技術の力なしでは成し得ないことも事実です。

さらに合理的な意思決定を行う「公智」も重要です。資源の配分の優先順位や復興財源などぎりぎりの判断が求められるとき、楽観論や精神主義に走ることなく、冷静に判断し、少しでも望ましい選択を行う知的強韌さを持つことが必要です。

福澤先生のいう科学という意味での「実学」に基づき、「公智」によって冷静かつ合理的な判断をすることが求められています。同時にその根底には、困っている人に対する思いやりや同情心、すなわち徳心がなければならないと思います。

皆様にとっての新しい一年が素晴らしい年となりますことをお祈り申し上げますとともに、これからも福澤先生の精神を携えられて、福澤育林友の会の活動もますます発展されますことをお祈り致します。





新しい年を迎え、2012年が明るい年であることを願っています。

2011年は、3.11の東日本大震災と津波による甚大な被害、さらに福島第一原子力発電所の事故という、かつてない惨事が起きた年として歴史的にも記憶される年でした。津波災害からの再生復興には相当の年月と財源が必要であり、さらに原発事故の収束には数十年がかかるという先が見えにくい状況です。昨年は日本ばかりでなく、世界的にも自然災害が多発した年でした。9月上旬の台風12号は紀伊半島に記録的な豪雨で大きな被害をもたらしました

が、タイでは広範な地域にタイ最悪の洪水といわれるほどの被害を及ぼし、フィリピンの台風でも数十万人が被災し、米国中南部でも壊滅的な竜巻で350人以上の死者を出しています。

近年多発する自然災害が地球温暖化の影響かどうかはにわかに判断できませんが、地球環境問題に関する関心はこれまでになく高まっています。昨年は、震災後の再生・復興に向けた様々なイベントやシンポジウムなどが各地で開催されました。本塾でも震災後直ちに医療支援団を派遣したほか、学生を中心として南三陸町でボランティア活動を行ってきました。6月には本塾主催で「震災後の東日本の復興・再生に向けて」のシンポジウム、12月にはSFCの環境イノベータープログラム「post disaster constructionからresilient societyの創造にむけて」という国際シンポジウムを開催しました。2011年の文科省リーディング大学院プログラムに、義塾から2つのプログラムが採択されましたが、その1つは「グローバル環境システムリーダープログラム」です。これは、理工学および政策・メディア研究科を中心に「緊急時に環境へ急激なダメージを与える変化への即時対応能力を備えるグローバル環境システム」という人材の育成を目標とした分野横断的なプログラムです。

福澤育林友の会は昨年10周年を迎えましたが、これまで財団法人福澤記念育林会が主管してきた学校林が義塾に移管されました。農学、林学科を持たない義塾で、学生・生徒が直接森林に入り、育林などを体感するには、絶好の教場でもあります。塾員・塾生の中には森林・環境・自然・教育に関心をお持ちの方も多く、学校林を義塾の環境教育・研究に有効活用する知恵をお持ちだと思います。ご意見やご支援などございましたら、ぜひお寄せいただきたいと思います。

「福澤育林友の会」設立から今日まで

海瀬 亀太郎
(慶應義塾評議員・昭40法卒)

財団法人福澤記念育林会(以下単に財団と記す)は慶應義塾元塾長の高村象平氏が、福澤諭吉記念基金(現 福澤諭吉記念慶應義塾学事振興基金)の財政基盤を確立する一方策として学校林の造成を考えられ1965年に設立されました。高村氏は当時「慶應義塾は百年続いてきた。これからも百年、二百年続くわけだから“永遠の財産”として学校林があってもいい。今は間に合わなくても半世紀のちの若い人たちが恩恵を得ればそれでいいじゃないか、と語られていました。以来、財団は学事振興基金からの補助金と、林業三田会からの寄付金により育林活動を継続して来ました。

しかし、財団所有森林の規模拡大等により管理経費が増加したのに加え、スポンサーであった林業三田会も林業不況の影響を受け、年々会員の減少傾向が顕著になって来ました。

このような状況を踏まえ、当時 慶應義塾常任理事として財団を担当されていた長島 昭氏と相談の結果、財団活動を支える組織を設立する事となり準備活動を開始、2001年には森林管理に必要なと

する資金の援助と、会員に森林の本来の姿、育林の役割などを体感して頂くことを目的とした「福澤育林友の会」が発足しました。

この会は、森林・環境・自然・教育に興味を抱く方々に幅広く参加を頂くと共に、運営に当たっては有志会員に無償ボランティアをお願いして経費を抑え、皆様方から頂いた会費を最大限に有効活用出来る様に配慮しております。爾来「福澤育林友の会」から得た資金により、今まで手入れが行き届いていなかった財団所有の森林整備が急速に進み、健全な森林へと変容を遂げつつあります。

さて、2008年には公益法人改革に関する法律が施行されましたが、関係省庁と協議の結果、育林事業は公益事業には馴染まないとの結論を得て、2011年に財団を解散し所有する山林を含む全ての財産を慶應義塾に移管いたしました。これにより森林は名実ともに学校林となり、育林事業は再スタートを切りました。

今後は一貫教育校を始め大学・大学院において、教育活動の一環として、また社会人教育の場として、この森林を有効活用する事が求められています。

この活動を支えるには、経済的な支援はもとより、幅広い活動支援が必要です。「福澤育林友の会」の役割はより重みを増して来たと考えています。今後とも、会員組織の発展と拡大に向けて、ご協力を頂きたくお願いいたします。

最後に、昨年秋「福澤育林友の会」10周年を記念し紀州和歌山「熊野古道&清水の森」を訪れる旅を計画していましたが、紀伊半島を襲った豪雨災害により中止せざるを得ませんでした。現地の関係者からも出来る限り早い時期に皆様方のご来訪を熱望する声が寄せられています。安全に旅が出来る状況になり次第ご案内を致しますので、その際にはぜひご参加頂きたくお願いいたします。



これまでの研修旅行に参加して

三田 貴良 (平成7法卒)

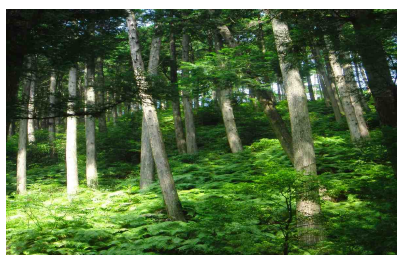
福澤育林友の会の初回研修旅行に参加したのは9年以上前になる。以来毎年、全国にある慶應義塾の森を回り、森を守り育てている方々からさまざまなことを教わってきた。

木の生態から日本の林業の実態、森林にかかわる人々の考え方。中でもある「森のプロ」から聞いた「植林した木が材木として使えるようになるには50年かかる。つまり私の切っている木はおじいさんが植えた木。私が植えている木は孫が切る木」というフレーズには、林業という産業のもつ壮大さを感じずにはいられなかった。

森のプロたちに案内され慶應義塾の森を歩き回る研修旅行は「体の健康」と「心の健康」を保つ絶好の機会であった。今回、財団法人福澤記念育林会の解散に伴い、所有する山林は慶應義塾に学校林として寄付をし、授業の一環で利用していただくことになる。慶應義塾で学ぶということはなんと素晴らしい、なんと恵まれたことなのだろう。

福澤育林友の会としての活動は今後も続いていく。これからも学校林を見守り続けたい。





志木高校では、毎年、有志生徒による「志木の森ツアー」が行われています。三重県にある約3haにおよぶ山林で、寄贈者である林業家の吉田氏から、下草刈りや枝打ちなど山の作業を教わり体験します。樹高調査や雑木林の樹種調査なども行い、普段の授業では経験できないことに、生徒たちは緊張しながらも興味津々に取り組んでいます。汗を流した後はカヌーや山々を眺めながらのサイクリング、釣りや野外料理、そして世界遺産でもある「熊野古道」を歩き、伊勢神宮に参拝。そして、夜には再び「森のセミナー」でCO₂固定など、これからの森の活用法を勉強したりしています。

このツアーも1996年から始まりましたので、もう15年になります。最初の数年は、何も無い斜面に膝丈ほどの苗をひたすら植樹する作業でした。当時塾長であった鳥居先生や理事の長島先生がその都度、足を運んでくださり、生徒たちも塾長と植樹ができると喜んで一緒に作業をしたのを覚えています。

この木々も15年が経ち、樹高も10mを越え、ようやく森らしくなってきました。自分が植樹した木が大きく成長していくのを見るのは何とも言えない気分です。

私も今になって初めてこの活動の魅力に気付かされた気がしています。有志生徒は毎年僅か十数名ですが、とにかく先輩から後輩へと受け継ぎ、森を育てていくことを地道に続けることこそが大切であると考えています。これからも森の成長のようにゆっくりと、しかし絶えることなく活動を続けていきたいと思っています。

修善寺「幼稚舎の杜」

幼稚舎事務長 太田 道夫

平成11年、伊豆修善寺に塾員井草實氏が用地の山林を提供して下さり、ここに幼稚舎生がクヌギ・コナラなどの植林活動を行い、「幼稚舎の杜」として育てていくことになりました。修善寺は昭和19年に幼稚舎生が疎開したところで、幼稚舎にとっては意義のある場所です。

近年修善寺界隈の山林もシカが増えており、11回目の植林となった一昨年からはシカの食害から苗を守るため「ヘキサチューブ」(ツリーシェルター:下段左写真)を使用するようになりました。カヤが茂ると日照が不足し苗の成長は遅くなりますが、その反面シカの食害からは守られます。ところが苗を植えるためには、カヤなど下草刈りをせねばなりません。この二律背反解決にはこのプラスチック製チューブが威力を発揮します。今年3月に予定されている植林活動の下見・打ち合わせのため昨年12月5日に現地を訪れましたが、以前植えた苗がチューブの中でまだ青々と茂っていました。

将来的には「幼稚舎の杜」に育った樹木の伐採・シイタケのホダ木作りなども考えています。ここまでできれば植林だけでなく、「持続可能な」里山のモデルを構築することも可能となるでしょう。

